

「西湖十景」と近世日本の風景観

鈴木 陽 一

1 はじめに

本小論は、瀟湘八景の影響を受けた日本の風景観が、その後西湖に関わる絵画、詩詞、物語などの影響の下で変貌を遂げていった過程について、検討を行う。議論を始めるにあたり、おおよその見通しを予め示しておくことにする。

北宋に成立した「瀟湘八景」は、風景を季節と時によって切り取ってみせるという画期的なものであった。また、これが禅宗の文化によって受け入れられたこともあってその影響は極めて大きく、多くの画家、文人がこの題材によって創作を試みた。日本には13世紀頃、禅僧によって伝わったことが確認され、特に14世紀以降禅僧を中心に、堀川貴司『瀟湘八景——詩歌と絵画に見る日本化の様相』によれば、14世紀前半の禅僧鉄庵道生による「博多八景」に始まり、様々な場所で「～八景」が設定され絵画においては「瀟湘八景」が、そして詩においては各地の風景を瀟湘に見立てた「～八景」が数多く作られた。

「瀟湘八景」の受容については、江戸初期に成立した安楽庵策伝『醒睡笑』に、「煙寺晚鐘」の意味も分からぬまま知ったかぶりをするエピソード⁽¹⁾があること、17世紀早々に出版された『日葡辞書』に「瀟湘八景」そのもの及び八景のそれぞれが語彙として収録されている⁽²⁾ことを見ればその広がりも明らかである。そして、日本文化に受け入れられ定着した「瀟湘八景」は17世紀中期から後期にかけて、二つの人口に膾炙した八景を生み出した。それが「近江八景」であり、「金沢八景」である。

「瀟湘八景」の中で挙げられた風景は、しかし「近江八景」や「金沢八景」とは大きな違いがあった。「瀟湘八景」で取り上げられた風景の示す範囲は、湖南省全域にわたるほど大きなものであった。このことを分かり易く説明しているのが以下の文章である。

瀟湘とは中国の湖南省を流れるふたつの河の名前（瀟水・湘水）に基づく地名で、これらが合流して洞庭湖という大きな湖にそそぐ地域をこう呼んでいます。中国有数の景勝地として名高いこの瀟湘の地は古くからさまざまな神話や伝説に育まれ、数多くの詩人や画家たちが訪れました。美しい場所を一目見たいという欲望は、いつの世も変わるものではありません。北宋時代（11世紀）に活躍した画家・宋廸もそんなひとりだったのですが、彼はそこで八通りの景観を選び絵画化しました。これが瀟湘八景のはじまりです。残念なことに宋廸が描いた瀟湘八景図は遺っていませんが、史料によると、彼が選んだ景観は次のようなものでした。

市のにぎわい（山市晴嵐）、遠く海上を帆船が行き交うさま（遠浦帰帆）、のどかな漁村の光景（漁村夕照）、ひっそりとした山あいの寺の鐘がゴーンと鳴るところ（遠寺晚鐘）、しとしとと降る夜の雨（瀟湘夜雨）、湖上に浮かぶ月（洞庭秋月）、砂浜に雁が舞い降りるところ（平沙落雁）、山

に雪が降り積もるさま（江天暮雪）。

どれも私たちの心に染み込んでくるような風情のあるものばかりですが、ここで面白いのは八景の選び方です。どの景観も四季や晴雨などの気象、昼や夜などの時刻の違いを強く意識して選んでいることに気づかれるでしょう。

一般に名所を描く場合にはその中心となる□□山とか○○寺といったある特定の場所や建物などをあらわすことが多いのですが、どうやら宋廸の意図は瀟湘地方の豊かな自然をあらわすことにあったようです。（「京都博物館デイクシヨナリー・瀟湘八景図を楽しむ」なお、原文は子供に読めるようにという配慮か、ほとんどの漢字に読みを（ ）で補っているが、全て割愛した。）

これに対し、「近江八景」と「金沢八景」に挙げられた風景はそれぞれが極めて限定的な場所を指し示しており、「瀟湘八景」が風景を「面」として示しているのに対して、ほぼ「点」を指しているのである。このことだけでも、日本の「近江八景」や「金沢八景」が「瀟湘八景」の言葉を借りているからというだけで、両者が同一の風景観に基づくとはとても言えないと思われる。なお、その大きさの違いを、文末の附图（1～3）で示した。

こうした風景観の大きな転換の一つには中国伝来の文化の日本化として理解できよう。しかし、それと同時に、「瀟湘八景」と「金沢八景」が定着した時期を考えると、中国の明代から清代にかけての風景観を受け入れたことが日本の「八景」という風景観の転換に少なからぬ影響を与えた可能性が高く、特に美術や文学作品を通して日本人が享受した杭州西湖の風景、一般的には「西湖十景」として知られる風景観の影響を考える必要がある。その明確な証拠として、金沢八景の比較的早い時代の風景図には



図1 「西湖之八景武之金澤模写図」
（横浜市立図書館金沢図書館蔵）

「西湖之八景武之金澤模写図」（横浜市立図書館金沢図書館蔵）、「比西湖金澤八勝景略図」（横浜市立図書館金沢図書館蔵、図1）と記載されているものがあり、八景の選択に杭州人である心越の関与を取り上げるまでもなく、「金沢八景」の風景のもとに西湖の風景があることは間違いない。

日本の「八景」に、「瀟湘八景」と「西湖十景」との影響が見られることは今さら言うまでもないことであるが、以下に見るように、その影響の過程はそれほど単純なものではない。従って、本稿では、「西湖十景」に代表される杭州・西湖に関わる風景観を軸に、「瀟湘八景」との違い、日本の風景観の一つの典型でもある「近江八景」や「金沢八景」への影響について述べていくことにする。

1 「西湖十景」と「瀟湘八景」

ここでまず、「瀟湘八景」と「西湖十景」の中身を確認しておく。

「瀟湘八景」が瀟湘夜雨、平沙落雁、煙寺晚鐘、山市晴嵐、江天暮雪、漁村夕照、洞庭秋月、遠浦帰帆の八景であり、「西湖十景」は蘇堤春曉、麴院荷荷、平湖秋月、柳浪聞鶯、斷橋殘雪、花港觀魚、双峰挿雲、南屏晚鐘、三潭印月、雷峰夕照の十景である。十景に関しては、多少出入りがあるが、『方輿勝覽』に見える最も早い「西湖十景」でも雷峰夕照が雷峰落照となっている程度であるため、今日の我々が熟知している「西湖十景」をもとに議論を進める。

両者を比較したときに、示されている地点が、「瀟湘八景」では面であるのに対して、「西湖十景」ではほぼ点であることはすでに述べた。その他の違いを少し考えておくことにしよう。

「瀟湘八景」では、季節、時、気候などに変化のあるものが選択されているとともに、「夜雨」、「落雁」、「暮雪」、「帰帆」と動きのある風景が多い。これが、「瀟湘八景」が画題でもあり、詩のテーマとなり、更にはそこに哲学や禅家の思想につながるものがあるとされた理由の一つかと思われる。これに対し、「西湖十景」では静的な風景が多い。同じ雪を扱っても、「西湖十景」の方は「残雪」であって溶け残った雪の状態である。確かに「西湖十景」でも「聞」、「観」と動詞が使われているが、いずれも状態動詞であって、動きが感じられるものではない。風景が二つ増えている中で、音にかかわるものが「晚鐘」に新たに「聞鶯」が加わっていることと、香りを風景に重ねている「麴院風荷」が新味を出していると言えよう。

その一方で、「瀟湘八景」では月を風景に絡めたものが、「洞庭秋月」一つであるのに、「西湖十景」では「平湖秋月」と「三潭印月」と月が二度も使われている。しかもどちらも、天上の月と湖面に映る月とが風景の中心であるということ、また季節としては秋の風景にされていることなど明らかに重複している。さらに、「平湖秋月」はもともとどここの場所かが特定されておらず⁽³⁾、西湖の周囲どこから見ても、或いは西湖に船を浮かべて見てもかまわないのであり、その点では唯一「瀟湘八景」を受け継いだ面的な風景である。従って、「西湖十景」の他の九景とは異なっているのである。

この点については、『夢梁録』巻十二に、「近きは、画家は湖山の四時の景色最も奇なる者に十有りと称す。曰く蘇堤春曉、麴院荷風、平湖秋月、斷橋殘雪、柳岸聞鶯、花港觀魚、雷峰落照、兩峰挿雲、南屏晚鐘、三潭印月。」とあり、「西湖十景」が画題に由来するものであることを述べている。これが「西湖十景」に静的な風景が多いことにつながっているように思われる。「洞庭秋月」をそのまま踏襲し、「平湖秋月」となって受け継がれたのも、天上の月と湖面の月という風景は「瀟湘八景」の中でも最も絵画の題材になりやすいという考えがあったのかと思われる。

同時に重要なことは、西湖が「真珠」に喩えられる美しい風景であるとともに、中国としては異例とも言えるほど、小さな湖とその周辺に人々を引きつける風景が集中していることだ。これもまた、西湖と絵画、「西湖十景」と絵画が結びつく要因になったと思われる。およそ中国の中で、一日船を浮かべれば、素晴らしい風景を十分に堪能できるという環境はそれだけで希少価値があり、絵画の世界でも、文字の世界でも、独自の価値評価を受けるに至ったのである。

しかしながら、「西湖十景」が南宋期に形成されたものの、それがただちに多くの人々に受け入れられていったわけではない。特に元明時代には、戦乱の後遺症とともに、西湖が余りに人々の暮らしと密接に結びついていたため、環境破壊を招き、しばしばその美しさが失われていたのである。この点について、『西湖遊覧志』は面白いことを述べているので、その大意を以下に記す。

南宋が杭州を都とした後、この地は大いに繁栄したがそのため水不足に陥り、当時の官僚が相図って天目山系から西湖まで水を引き、以て都市の人々を潤したのである。ところがその頃の皇帝も重臣も安逸に耽り、失った国土を回復しようとはしなかった。そのことを後の人々が西湖の美しさのためであるとしたため、元は宋の轍を避けようと西湖を放置し、その結果西湖は桑田と化した。明代になっても状況は変わらず、特に蘇堤の西側は畑となり、あぜ道が縦横に造られる有様で、蘇堤の東側も山から水がわずかに流れ込むだけとなった。宣徳、正統以来ようやく少しずつ改善されるようになったが、特に正徳三年郡守の楊孟瑛（1459年～？年、字温甫、四川省重慶府忠州酆都県の人）が奏上し、徹底的に西湖の治水工事を行った結果、ようやく本来の面目を取り戻したのである。白樂天から二百年後に蘇東坡が出現して西湖を救い、そこから四百年後に楊孟瑛が再び西湖を救ったのである⁽⁴⁾。

『西湖遊覧志』のこの部分に引かれた楊孟瑛の上奏文では、西湖の水を守ることは杭州の市民の水を守ることであり、さらには周辺の農村部の人々の暮らしを守ることであり、それが同時に風景の美しさを守ることにつながるということが述べられている。西湖と杭州の人々との暮らしが密接に結びついていることが、杭州の人々の西湖への思いにつながり、文学や美術の題材となるとともに、それが常に環境の汚染や破壊に容易につながることで、そうした汚染と破壊から西湖の水と風景の美しさを守るには、政治による強いコントロールが必要であることを、楊孟瑛も、『西湖遊覧志』の著者田汝成のいずれもが気がついていたのである。因みに、楊孟瑛は西湖の復活に成功しながら、そのために大量の資金を浪費したとして弾劾され、結局辞任に追い込まれており、西湖の風景の維持は政治的な戦いの場であったことを示している⁽⁶⁾。

田汝成の示唆を受け、我々は「瀟湘八景」と「西湖十景」の違いは、風景の面と点、動的と静的、哲學的かつ思想的な要素を含んだ風景と画題に相応しい風景、そうした違いの他に、「西湖十景」が都市の暮らしと密着しているがために環境の汚染と破壊から西湖を守ることによってのみ成立するという、まさに人間的風景であることが大きなポイントであることを理解するに至った。このため、意外にも、南宋から明にかけて、日本の安土桃山から江戸時代初期と重なる時期には、「西湖十景」の美しさはかなり長期に渡って失われていたものであり、その結果として、「西湖十景」の個々の風景は明代に於いてはそれほどポピュラーなものではなかったり、或いはその風景が実質的に破壊されていた可能性がある。

2 明代における「西湖十景」の受容

もう少し、明代における「西湖十景」の受容について見てみよう。明代の西湖に関する記録として最も信頼できる『西湖遊覧志』には、「西湖十景」について述べた箇所が二カ所ある。その一つが「柳浪聞鶯」についての、以下のような記述である。

學士橋とは「夾字橋」の誤りであったろうか？ 南宋の『咸淳臨安志』、『夢梁錄』等の書籍には「夾字橋」の名は無く、ただ『武林旧事』のみ「學士」、『柳浪聞鶯』等の橋の名があげられている。「柳浪聞鶯」が「西湖十景」の一つとなったのは、根拠がないわけではない。（『西湖遊覧志』第三卷「南山勝蹟」⁽⁵⁾）

今ひとつ、「花港觀魚」についての、以下のような記述がある。

（大麥嶺）の麓に以前は法空寺、資聖院、盧園（中略）などがあったが、現在は廃された。法空寺は旧名を資慶寺と言った。資聖院は濮王の墓である。盧園はかつて宋の内侍盧允升の別邸であり、その眺めは素晴らしい。庭内に池があり、模様のある石やレンガを配してあり、水は清く深さもあって様々な魚が飼われていた。「西湖十景」の「花港觀魚」とはこの地を指す。（『西湖遊覧志』第四卷「南山勝蹟」⁽⁷⁾）

これらの記述から「柳浪聞鶯」がどこを具体的に指すのか、ということが田汝成にも必ずしも分っていたわけではなく、「武林旧事」にある橋の名を根拠に推定せざるを得なかったこと。「花港觀魚」の場所とされた庭園も己に廃されていたため、その地点が同定しにくいと考えていたことが読みとれる。この二つの記述に加えて、『西湖遊覧志』の嘉靖の版本には以下の記述がある。

湖の中にはかつて三塔と湖心寺があったが今は廃された。三塔とはもともと外湖にあり、鼎立していた。弘治年間に僉事陰子淑が、（中略）寺を廃し、その塔も撤去した。湖中には三カ所の深い

潭があり、その深さは測れぬほどであった。「西湖十景」の「三潭印月」とはこれを指すのだが、この潭を鎮めるために三塔を建てたと伝えられている⁽⁷⁾。

田汝成の見ていた西湖には、もはや三塔は無く、今の西湖の三塔付近で行われている中秋節の船上の月見もなかった。伝えられる伝説を記録しているのみである。さらに、萬曆四十七年の刊本では、この部分に大幅な加筆があり、三塔について、「清平山堂話本」所収の『西湖三塔記』の物語に触れるものの、塔そのものについては全く記述がない。しかも、この地に「喜清閣」という建て物が建てられ、文昌帝を祀り、文人がこれを好んだという記述がある。従って、「三潭印月」の記憶と伝承は消えかけていた可能性が高い。

なお、『西湖遊覧志』の第二十二卷「北山分脈城外勝蹟」に「夾城八景」について詳しく述べていて、その内容は「～夜月、～春漲、～春紅、～晚翠、～啼鶯、～積雪、～暮雨、～烟村」とあり、数だけでなく、「瀟湘八景」により近い。西湖と目と鼻の先にも「瀟湘八景」に倣った風景観が残っていることから、「瀟湘八景」の影響力の強さを窺うことができる。その一方で、「西湖十景」のうち名が上がっているのは「柳浪聞鶯」、「花港觀魚」、それに「三潭印月」のみである。蘇堤の記述の中で引用された詩の中に「春晚」の語が見えるということでこれを含めても、四カ所だけということになる。しかも、いずれの場所もその本来の姿を失っていたらしいのである。

嘉靖二十六年（1548）に刊行された『西湖遊覧志』から一世紀近く経過した崇禎年間（1628～1644）に刊行された『西湖二集』は、西湖を題材にした小説集であるが、ここでも「西湖十景」についてはほとんど記述がない。わずかに第十四卷『邢君瑞五載幽期』の中で、邢君瑞が創ったとされる「西湖十景」の詩が挙げられているのみである。

邢君瑞好不樂意，日日遊於南北兩山之處，遂題「西湖十景」詩

《蘇堤春曉》：孤山落日趁疏鐘，畫舫參差柳岸風。鶯夢初醒人未起，金鴉飛上五雲東。
 《斷橋殘雪》：望湖亭外半青山，跨水修橋影亦寒。待泮痕邊分草綠，鶴驚碎玉琢闌干。
 《雷峰夕照》：塔影初收日色昏，隔牆人語近甘園。南山游遍分歸路，半入錢塘半暗門。
 《曲院風荷》：避暑人歸自冷泉，埠頭雲錦晚涼天。愛渠香陣隨人遠，行過高橋方買船。
 《平湖秋月》：萬頃寒光一夕鋪，冰輪行處片雲無。鶯峰遙度西風冷，桂子紛紛點玉壺。
 《柳浪聞鶯》：如簣巧囀最高枝，苑柳青歸萬縷絲。玉輦不來春又老，聲聲訴與落花知。
 《花港觀魚》：斷汲唯餘舊姓傳，倚闌投餌說當年。沙鷗曾見園興廢，近日遊人又玉泉。
 《南屏晚鐘》：澗水崖碑半綠苔，春遊誰向此山來。晚煙深處蒲牢向，僧自城中應供回。
 《三潭印月》：塔邊分占宿湖船，寶鑒開奩水接天。橫笛叫雲何處起，波心驚覺老龍眠。
 《兩峰插雲》：浮圖對立曉崔嵬，積翠浮空霽靄迷。試向鳳凰山上望，南高天近北煙低。

ここにあるのは、「西湖十景」を題材とする過去の詩のイメージをなぞったものであり、南宋以来の「西湖十景」に一定の影響力があつたことが証明されているにすぎないし、「花港觀魚」と「三潭印月」は『西湖遊覧志』にあるようにすでに本来の姿ではないように描かれている。

私はむしろ、第十九卷『俠女散財殉節』に見える「儉丫鬟十景」という表現に注目したい。これはどうやって妻に仕える召使いをつまみ食いをするのか、その秘訣を十景として並べ立てたものである。

野狐聽冰 老僧入定 金蟬脫殼 滄浪濯足 回龍顧祖
 漁翁撒網 伯牙撫琴 啞子廝打 瞎貓偷雞 放炮回營

ここには、「瀟湘八景」にも「西湖十景」にも共通する表現は全くなく、漢字四字だけが共通しているにすぎない。しかし、男が妻の横で寝ていた寝台を抜け出してどのように召使いの寝台に潜り込み、攻略に失敗したかを、有名な史実、伝承、物語のパロディの形式で表現しているもので、こうしたことを十景として表すこと自体もパロディの一部を為している。

漢字四文字を用いて表現される「瀟湘八景」のバリエーションとしての「西湖十景」は、個々の風景については必ずしも長期に渡って安定的にその美しさが維持されていたわけではなかったが、十景という考え方それ自体は、パロディというバリエーションを生み出すくらいに、人々の意識の中に定着していた。しかも、個々の風景についても、その記憶が歴史として、或いは物語の一部として、或いは物語のかけらとして人々の記憶の中で伝承されていき、折に触れてそれが蘇ってくるようなものであったということを確認して先へ進む。

3 西湖図とその視点

ここで、「西湖十景」と深く関わり、かつ、日本の風景観に大きな影響を与えた「西湖図」について検討することとしたい。ここで特に注目するのは、西湖をどのような視点から見ているか、またその視点と画題と「西湖十景」との間にどのような関係が成立しているのかを見ていくこととする。



図2 「西湖図巻」(南宋)

<http://www.tnm.jp/uploads/fckeditor/exhibition/special/2013/shanghai/uid000067201308161720234d6f3acc.jpg>

この図2は、現存する西湖図の中で最も初期の西湖図で、通称は西湖図巻、南宋時代（13世紀頃）

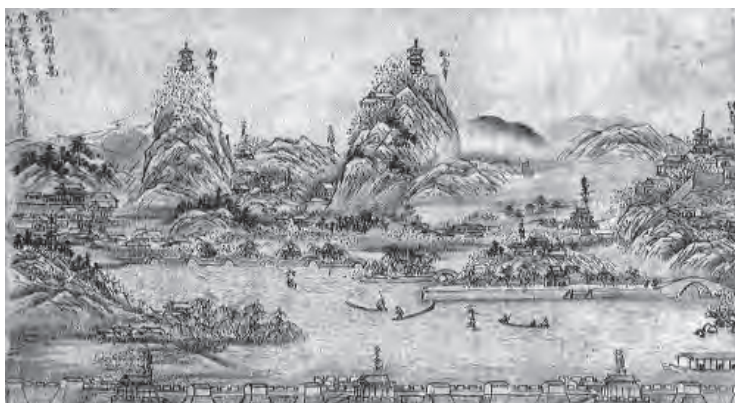


図3 秋月等観「西湖図」

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kaiga/images/3-1.gif>

に描かれたと考えられている。上海博物館所蔵の素晴らしい作品で、上野の東京博物館の東洋館リニューアル記念の際に展示されたものである。後の時代の西湖図と比べて、この絵の視点がかかなり高いところに置かれていることと、見る位置が杭州の南に偏り、かつ視点はやや東北に向かっていていることが特色かと思う。その結果として、雷峰塔と斷橋が手前に描かれ、正面に描かれることの多い南高峰北高

峰が画面の左側の片隅に収まっている。これが他の絵画と異なる視点を有しているのは、この図が南宋時代のものであること、南宋の都臨安（杭州）の宮殿は杭州の南に位置する呉山にあったことによる。つまり、この図は呉山からの視点、言い換えれば皇帝の視点で描かれているのである。また、これは視点との関係ではないが、蘇堤が小さく遠く描かれ、他の「西湖図」に比べ、孤山が大きく描かれていること、また湖中の島が一つも描かれていないのは、一つの大きな謎である⁹⁾。

図3は石川県立美術館所蔵の西湖図で、作者は秋月等観。作品の左上に「杭州西湖之図、於北京会同館作此図、弘治玖年閏三月拾三日」の書き込みがあり、秋月が、明の弘治9年、日本の明応5年（1496）に、中国北京の会同館で描いたことが知られている。西湖を杭州城内から正面に見る、つまりは東にある街から西を見るという角度で描かれている。右上の山上に保俶塔、左の端に雷峰塔が描かれ、正面奥に南北の高峰、その下には蘇堤六橋が描かれている。

日本の最も早い時期の西湖図であり、かつ中国で描かれたことから、こうした角度で西湖を見るのが後の作品にとってある種の規範となったのではないかと考えられる。

図4は室町時代または江戸時代（16～17世紀）に描かれたもので、静嘉堂文庫美術館所蔵の作品で、雪舟の作かとも言われている。この図の視点もまた正面からであり、描かれる対象もほぼ同一である。南北高峰の間が大きく離れているのはやや不自然であり、かつこれでは、「双峯挿雲」という「西湖十景」の風景の一つが成立しないが、ほとんどの「西湖図」が南北高峰を完全に別の嶺として描くようになる。

図5は出光美術館所蔵、狩野元信の西湖図屏風（左双）、2010年同美術館で開かれた「屏風の世界」という展示の際に作成されたパンフレットによるものである。ここでは後ろの山が大きく描かれ、かつ、蘇堤とおぼしき堤とそこに架けられたアーチ型の橋が描かれている。角度はやはり杭州の街から西湖を正面に見るもので、湖中の島々も描かれている。背後の山の描き方が等観のものとは異なっているが、視点と描写の対象となっているものはほとんど同一である。また南北高峰の距離は、静嘉堂文庫所蔵のものより更に遠くなっており、「西湖十景」とは無関係の証拠にもなる。

図6は中国の康熙年間（17世紀末）の西湖画卷、その四分の一である。絵画というよりも絵巻物に近い作品であるが、その視点はやはり城内から、西湖を正面に見るというものである。しかし、個々の場所、ここで言えば蘇堤の描き方



図4（伝）雪舟「西湖図」

<https://images.dnpartcom.jp/ia/getImage?file=SAMA2238X001-L.JPG&size=L>



図5 狩野元信の「西湖図屏風」

https://pds.exblog.jp/pds/1/201007/04/04/b0044404_19261171.jpg



図6 康熙年間の「西湖画卷」
<http://p1.pstatp.com/origin/28970004e637a8d69d80>



図7 張若靄「西湖図」
<http://img1.artron.net/auction/2012/art502799/d/art5027990569.jpg>

で、ここに挙げた西湖図の視点と重なり合っている。「三潭印月」については、塔そのものは街から見



図8 東京後楽園の西湖堤。徳川光圀の命により、朱舜水が設計したかと思われる

は日本のものに比べれば極めてリアルである。

図7は少し時代が下り、18世紀に描かれた張若靄（1713-1746）字晴嵐の西湖図である。角度はこれまでのものと異なり、湖のほぼ真南、玉皇山のあたりから描いたもので、孤山が正面に描かれているが、「西湖十景」はほぼ視野の中に入っている。蘇堤は左に位置しているが、中央の「三潭印月」の三塔とともに、重要な画題の一部となっているように見える。張若靄は安徽桐城人。その父張廷玉均雍正、乾隆朝の大学士である。

この絵画はオークション用にネットに上げられているが、そのせいで、左右が大きくカットされているように思われる。

ここまで西湖を描いた絵画の視点を見てきたが、ここで再度「西湖十景」の視点について考えてみたい。簡単に結論を述べてしまえば、十景の大半、「斷橋残雪」、「蘇堤春曉」、「双峯挿雲」、「雷峰夕照」、「南屏晚鐘」、「柳浪聞鶯」、「平湖秋月」が城内から眺めることが可能なもの

2 近江八景と西湖堤

12世紀以降、日本に伝わった「瀟湘八景」はただちに様々な日本版のバリエーションを生んだ。その状況について

は、堀川貴司『瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相』（臨川書店、2002. 5、以下『瀟湘八景』と略す。）が極めて詳しく、本稿はこの点に関して多くを同書によった。また、アジア各地における現在までの影響については『国立環境研究所研究報告第197号』（国立環境研究所、2008. 1）によるところが多い。この二つの資料を参考にしつつ、「瀟湘八景」の日本への定着と普及についてまず考えておきたい。

現在のところ、『瀟湘八景』（pp. 86～88）によれば近衛信尹（1565～1614）による『近江八景図』（円城寺蔵）の自画自賛が依拠できる資料の最も早いものであって、おそらく17世紀前半には「近江八景」が定着し、急速に全国に普及していったと考えられる。「金沢八景」はこれより少し遅れ、17世紀中葉から後半にかけて成立し、普及していったものと思われる。

「近江八景」、「金沢八景」が成立するこの時期には、考えておかねばならない三つの重要な要素がある、第一に、この時期に先に挙げた「西湖図」の多くが描かれたということである。繰り返しになるが、西湖を正面から捉え、特に蘇堤を絵画の中心に置く構図が好まれたという点が重要であると考えられる。第二に、この時期に、中国から多くの文人、僧侶が日本にやって来たということである。彼らは、徳川光圀に重用された心越のように、彼らを保護した大名に対して様々な文化的貢献を行った。また少

なからぬ僧侶が日本の寺院に於いて、先進的文化を日本の知識人に向けて発信し続けていたと考えられる。第三に、この時期から17世紀末にかけて、有力大名が自らの庭園に西湖のミニチュアを造ろうとしたのである。図8～10は、それらの庭園の西湖のミニチュアである。この他に、芝白金台の旧高松藩（松平）別邸の科学博物館附属自然教育園にもその名残があり、広島浅野家（縮景園）、名古屋尾張徳川家（徳川園）もそれぞれ同じような堤防と小さな橋を庭園の中に造っている。これらの庭園から、日本の大名たち、或いはその周辺の文化人（その中には中国から渡来した文人や僧侶が含まれる）が、「西湖図」から西湖の風景が蘇堤にあると考え、それを再現しようとしたのだということを読み取らざるを得ない。そのことの意味を考えることで、この小論の結論としたい。



図9 浜松町駅前、旧相州小田原大久保家の別邸に造られた西湖堤。（筆者撮影）



図10 この橋は、和歌山県和歌浦の海中に17世紀の半ば建造された三断橋であり、これも蘇堤六橋を模したものと考えられている。（筆者撮影）

5 まとめにかえて

16世紀以後盛んに描かれた西湖図、そのほとんどは、西湖を杭州城内から見た視覚によって描かれていた。その結果として、「西湖十景」に代表される西湖の代表的な風景はその絵図の中にほぼまろごと収められることとなった。いや、どちらが先かの断定は避けよう。絵画の中に描くことが可能な風景を「西湖十景」として選んだ可能性も捨てることはできないのだから。いずれにせよ、文字で描かれた「西湖十景」と、杭州の城内から西湖図として描かれた風景とは概ね一致し、わずかにはみ出る風景は、視点を高く上げることで解決するのである。しかし、肝要なのはそこから先である。文字で書かれた「西湖十景」と、「西湖図」との一致は日本に二つの文化的現象を生じさせるきっかけとなった。

その一つは、蘇堤への過剰な思い入れである。西湖図の正面に置かれる蘇堤は、その堤防に架けられた六橋と共に西湖図の中心的な画題と認識された可能性が高い。特に、中国の石を用いたアーチ橋への憧れがそれに拍車をかけた。後樂園で、光圀は朱舜水に本格的なアーチ型の橋を架けさせているのはその証に他ならない。いや後樂園だけではない。和歌浦の三斷橋に飽き足らなかった徳川頼宣の子孫徳川治宝はわざわざ本格的なアーチ橋不老橋を架けさせているし、岩国の錦帯橋も西湖への憧れによって架けられている。そして、多くの大名が競って、自らの庭園に蘇堤と六橋のミニチュアを造ったのである。これこそ、西湖図と「西湖十景」とが一体化した西湖の風景を日本が受け止めた大きな影響であった。

さらにもう一つの影響は、最初に述べた、「瀟湘八景」と「近江八景」、「金沢八景」との大きさの違いに現れた。「瀟湘八景」が広大な地域を対象にしているのに対して、一目で見渡せるような風景を八景の中に入れ込んだ「近江八景」、「金沢八景」は、「西湖十景」と結びついている「西湖図」と平仄がピッタリと合っている。言葉は「八景」ではあっても、実質的に近江も金沢も瀟湘という地域とも、「瀟湘八景」の根本にある概念とも訣別したのである。但し、ここで一つ保留しておかねばならない問題がある。風景の地点としては完璧に西湖に近づきながら、地点と組み合わせられる語彙については、落雁、帰帆など「瀟湘八景」のものをほとんど踏襲しており、18世紀半ば以後「西湖十景」が普及した後も、語彙の変更は行われなかった。地点の選択と風景の見方を示す語彙の選択、そこにズレを残したまま、明治へと向かっていったのはなぜか、疑問が残る。

さらにもう一点、日本が少なくとも17世紀段階では西湖の歴史について、杭州の人々の生活との関わりを十分に理解してはいなかったことを付け加えておく。西湖が中国としては例外的に、狭い場所に、水と緑と丘とが集中し、美しい風景が存在していることはすでに述べた。しかしそれは単に自然が与えた造形の美ではなく、『西湖遊覧志』を引用して述べたように、或いは身近な例で言えば日本の里山のような、そして繰り返し浚渫が行なわれその時の土砂で築かれた蘇堤や湖心亭に代表されるような、杭州の生命を支える西湖の水を守るために続けられた人間の努力の成果が生み出した風景なのである。その成果は、西湖の水を守り続けた人々の事績と物語を絶えず想起させ、崇敬の念或いは信仰となって西湖の美しさに磨きをかけるエネルギーとなった。そのエネルギーはしばしば戦火で中断され、時に人々の欲望の力に打ち負かされるために、間歇的に噴出されるものではあったが、地下水脈として生き続け、時に画題となり、物語の舞台となり、「西湖十景」を人々にうつすらとではあっても、記憶させ続けた。そして、中国の歴史にしばしば登場する文化英雄の出現によってそのエネルギーは突然爆発し、破壊と汚染で見る影もなくなった西湖を再び美しい西施として蘇らせたのである。先に引用した『西湖遊覧志』の中で、田汝成が白樂天から200年後に蘇東坡、それから400年後に楊孟瑛と慨嘆したのはまさにそのためであった。だが、それが日本に伝わったとき、庭園に西湖堤を造成した大名や、「近江八景」や「金沢八景」の観光を楽しんだ庶民が西湖の美を造り上げた力の根本にあるものに気が

つくことはなく、西湖の美、西湖を模した美を楽しむことに満足したのである。日本人が西湖の風景の有する物語とその意味するものに気づくのはもう少し先のことになる⁽¹⁰⁾。

16世紀から17世紀にかけての日本人の西湖の美の受容に関して、それを消極的な意味のみで理解する必要は必ずしもない。西湖への憧れは、戦国時代の遺風、時に自ら船を仕立てて大陸との貿易を試みる大名が珍しくなかった時代の名残であり、その背景としての海外への憧れ、新たなものへの欲望などがそこには紛れもなく存在すると私は考える。その例を挙げよう。

島根県津和野町を支配していた津和野藩の初代は坂崎氏であったが、間もなく改易され、亀井茲矩の嫡子亀井政矩が後を継いだ。まだ家康の時代である。しかし、ここで注目されるのは父の亀井茲矩である。彼は秀吉から琉球守の称号を与えられており、実際に琉球経営を目指していた。また、一時期は浙江省台州への進出を考えていたのか台州守を名乗ったこともある。実際に自ら船を仕立てて貿易をするつもりでもあったが、残念ながらことごとく頓挫している。しかし、その後跡を継いで津和野藩主となった政矩にこの意思は受け継がれていた可能性が高く⁽¹¹⁾、亀井家の菩提寺であり森鷗外の菩提寺でもある永明寺にそのことを示す明白な証拠が残っている。

まず、永明寺というこの寺の名称が杭州と縁が深いことを知っておく必要がある。「西湖十景」の「南屏晚鐘」の舞台である浄慈寺の古名が永明寺なのである。それもあってか、この寺院は中国の禅宗と関わりが深く、後に隠元禅師が開祖となった京都の黄檗山萬福寺とネットワークを築いていた。その縁であろうか、杭州から日本に逃れてきた中国の心越禅師が、この永明寺の題額「覺皇山」を揮毫しているのである。但し、この縁はそんな軽いものではない。

1676年に薩摩に上陸した心越は長崎の興福寺を経て京都の萬福寺を訪れたものの、1680年おそらくは反清活動との関わりを疑われ、長崎に送還されて軟禁される。これは、清朝が政権を奪取したものの未だ安定せず、各地で清に反対する勢力との戦いが続き、幕府に対しても大名などを通じて反清の戦いを支援するよう要請があるなかで、幕府が極めて神経質になっていたことによる。幕府は清朝が大陸のかなりの部分を実効支配しつつあったことを知っていたため、清朝と明朝の残存勢力との間の戦闘に不介入の立場を維持しようとしていたのである。また、日本の禅宗の中で永平寺、総持寺に代表される勢力と、黄檗山萬福寺の勢力との間で、宗教儀礼をめぐる闘いがあったことも彼が軟禁される原因となって



図10 「武昌金澤八景之圖」金澤飛石金龍院藏版

http://blogimg.goo.ne.jp/user_image/5e/5c/5c136603516b71d3cb10171de4e6a5fc.jpg



図11 歌川広重「金沢八景」瀬戸秋月

<http://www.geocities.jp/toshiyoshi66jp/ukiyoe/uki/hiroshige/img/dl0178.jpg>

いた。その後、光圀らの支持を得て心越は自由の身になり水戸へ赴くのだが、それは鹿児島に上陸してから五年後のことであった。そして、彼がこの題額を揮毫したのは1680年、幕府の命により京都の萬福寺から長崎の興福寺へ送還される際のことであった。

こうした状況の下で、本国への強制送還も予想される時に、萬福寺系統の寺院である津和野の永明寺に立ち寄り、寺号が杭州の名刹の旧名に同じであることにおそらくは少なからぬ感動を以て題額を揮毫したと想像される。しかし、幕府は中国内部の戦争に不介入の立場から心越を軟禁するという決定がなされているなかで⁽¹²⁾、まさに国際問題の火種と言える人物、しかも同じような境遇の人物の中でも有名な人物を藩主の菩提寺に招聘し、題額を揮毫するということは、亀井氏の支持なしで実現したはずがない。ここに初代以来の亀井氏の海外への強い憧れが反映していると私は考えている。

アーチ型の橋への憧れも、おそらくは美意識だけの問題ではあるまい。石組みだけで重量を支えるその技術への強い関心がおそらくはあったのだと思われる。さらに、アーチ型の橋を架ける目的が、水運による人や物の移動を行うためであることを考えると、大きな河川にそもそも橋を架けることを許さない江戸幕府の政策に反発し、自由な行動への憧れがあったのではないかと想像する。美しい蘇堤の風景への憧憬、アーチ型の橋への憧憬、中国の文人、僧侶への崇敬、中国の書物や美術への渴仰、こういうものが戦国時代の遺風の表現であり、その最も穏やかでつましい表現が庭園の中の蘇堤のミニチュアではなかったろうか。

しかし、このミニチュアは後々まで影響を与えた。図10～11の二枚は江戸末期の浮世絵に描かれた「金沢八景」であるが、海の中でも依然として堤防と橋が描かれている。海外への強い憧憬がもたらした堤防と橋のミニチュアはやがて八景図にとって、それが実際にあるか否かにかかわらず、不可欠のものとなったらしい。

最後に、文中に触れた西湖の歴史と人々の暮らしが18世紀以後どのように日本に伝わったか、これについては別に稿を起こした⁽¹³⁾ことを付記して本稿の結びとする。ご教示、ご叱正を願いつつ筆をおく。

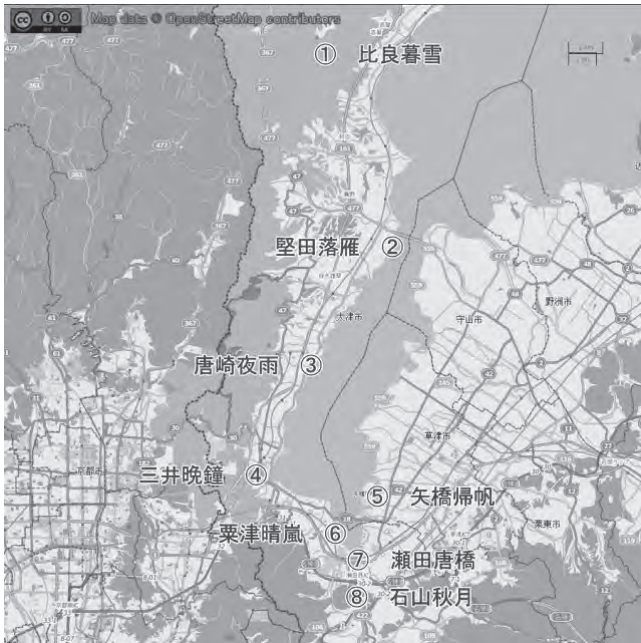
附図「瀟湘八景」と「近江八景」、「金沢八景」の差異



附図1 湖南省全図と「瀟湘八景」。八景は湖南省の半分以上の地域に該当する湖南省の面積は211,875 km²で、日本の半分以上より広い。図は中国版ウィキペディアによった



附図2 金沢文庫蔵元治年間(1660)の金澤八景図。一目で八景全体を見渡すことができる



附図3 「滋賀県徹底ガイド」による。日本最大の琵琶湖の景色ではあるが、京都に近い南西部に集中している
<http://4.bp.blogspot.com/>

注

- (1) 「八景のうちに、遠寺の晚鐘とは、村里とほき山寺に、入相の鐘の聲、つくづく聞くも面白やなどいふを、こびたることゝ思ひぬしが、或時客に寺へ行き、夕陽西に傾頃より暮をうちはじめ、火をともしども立つ事を忘れたるに、初夜の鐘も早とく鳴りぬるとはいはいで、「もはや皆おたちあれかし、遠寺の晚鐘もとく鳴つた」と。『醒睡笑』巻三「不文字」、冒頭の「八景」とは瀟湘八景を指す。）
- (2) 「Facqei」として、瀟湘八景の項目が全て挙げられ、かつ詳細な説明がある。また、「Xōxō」の項目に「瀟湘」の漢字が当てられ、さらに、「Facqei」を見よという指示がある。土井忠生、森田武、長南実編訳『日葡辞書』（岩波書店、1995. 11）、p. 194（Fの項）、p. 797（xの項）を参照。
- (3) 現在は孤山の南側に乾隆の碑が建てられているため、そこが「平湖秋月」の地点であるかのように考えられているがこれは誤解である。四文字の意味するところは、秋の澄んだ空に輝く月と穏やかな湖面に映る月を意味するのであって、本文で述べたようにどの地点で見ることでもある。
- (4) 至紹興建都、生齒日富、湖山表裏。點飾浸繁、離宮別墅、梵宇仙居。舞榭歌樓、彤碧輝列、豐媚極矣。嗣後郡守湯鵬、安撫周淙、京尹趙與簫、潛說友遁加濬理、而與簫復因湖水早竭、乃引天目山之水、自餘杭塘達榴水橋、凡歷數堰、桔槔運之、仰注西湖、以灌城市。其時君相淫佚、荒恢復之謀、論者皆以西湖為尤物破國、比之西施云。元懲宋轍、廢而不治、兼政無綱紀、任民規竊、盡為桑田。國初簫簪之、逐起額稅、蘇堤以西、高者為田、低者為蕩、阡陌縱橫、鱗次作义、曾不容刀。蘇堤以東、縈流若帶。宣德正統間、治化隆治、朝野恬熙、長民者稍稍搜剔古蹟、粉綸太平、或倡濬湖之議、渾更版藉、竟致閣寢。嗣是都御史劉燾、御史吳文元等、咸有題請、而浮議蜂起、有力者百計阻之。成化十年、郡守胡濬、稍闢外湖。十七年、御史口謝秉中、布政使劉璋、按察使楊繼宗等、清理續占。弘治十二年、御史吳一貫修築石閘、漸有端緒矣。正德三年郡守楊孟英、銳情恢拓、力排群議、言于御史車梁、僉事高江、上疏請之、嫩為西湖當開者五。

其略曰：「杭州地脈、發自天目、群山飛翥、駐于錢塘。江湖夾抱之間、山停水聚、元氣融結、故堪輿之書有云：『勢來形止、是為全氣、形止氣蓄、化生萬物。』又云：『外氣橫形、內氣止生。』故杭州為人物之都、財賦之奧區、而前賢建立城郭、南跨吳山、北兜武林、左帶長江、右臨湖曲、所以全形勢而周脈絡、鍾靈毓秀于其中。若西湖占塞、則形勝破損、生殖不繁。杭城東北二隅、皆鑿濠塹、南倚山嶺、獨城西一隅、瀕湖為勢、殆天塹也。是以湧金門不設月城、實倚外險、若西湖占塞、則腔徑綿連、容姦寇、折衝禦侮之便何藉焉^①。唐宋已來、城中之井、皆藉湖水充之、今甘井甚多、固不全仰六井、南井也。然實湖水為之本源、陰相輪灌。若西湖占

塞、水脈不通、則一城將復鹵飲矣^②。況前賢興利以便民、而臣等不能纂已成之業、非為政之體也。五代已前、江湖直入運河、無復遮捍。錢氏有國、乃置龍山、浙江兩閘、啓閉以時、故泥水不入。宋初崩廢、遂至淤塞、頻年挑濬。蘇軾重修堰閘、阻截江湖、不放入城、而城中諸河、專用湖水、為一郡官民之利。若西湖占塞、則運河枯澀、所謂南柴北米、宮商往來、上下阻滯、而閭閻貿易、苦于擔負之勞、生計亦窘矣^③。杭城西南、山多田少、穀米蔬藷之需、全賴東北。其上塘瀕河田地、自仁和至海寧、何止千頃、皆藉湖水以救亢旱、若西湖占塞、則上塘之民、緩急無所仰賴矣^④。此五者、西湖有無、利害明甚、第壞舊有之業、以傷民心、怨讟將起、而臣等不敢顧忌者、以所利于民者甚大也。」

部議報可、乃以是年二月興工。先是、郡人通政何琮、常繪西湖二圖、并著其說、故溫甫得以其槩上請。蓋為傭一百五十二日。為夫六百七十萬、為直銀二萬三千六百七兩、斥毀田蕩三千四百八十一畝、除豁糧種九百三十餘石、以廢寺及新墾田糧補之。自是西湖始復唐宋之舊。蓋自樂天之後、二三百歲而得子瞻、子瞻之後、四百歲而得溫甫。邇來官司禁約浸弛、豪民頗有侵園為業者。夫陂堤川澤、易廢雖興、與其浩費于已墮、孰若旋修于將壞。況西湖者、形勝關乎郡城、餘波潤于下邑、豈直為魚鳥之藪、游覽之娛、若蘇子眉目之喻哉。〔『西湖遊覽志』第一卷「西湖綜述」、下線は引用者による。〕

なお、楊孟瑛の上奏文では、下線部①～④すなわち西湖の水が侵略を防ぐ要害となっていること、西湖の水が飲用水となる井戸の水源となっていること、杭州城内の運河の水源となっていること、杭州の東と北の田畑、特に上塘地区の水源となっている、という指摘が重要である。それは、これが現実に即しているとともに、蘇東坡の「乞開杭州西湖狀」という上奏文を踏まえているからである。

- (5) 然則學士橋者、豈即夾字橋之誤歟。而宋時『咸淳志』『夢梁錄』諸書皆無夾字橋之名。獨『武林舊事』有「學士」「柳浪」等橋。而「柳浪聞鶯」遂為西湖十景之一、又不可謂無據也。
- (6) 西湖と杭州の人々の生活との関係について、特に西湖の水に依拠してきた人々の暮らしの中から水神への信仰と物語が紡ぎ出されたことについては、拙稿「白蛇伝」の解説—都市と小説—（本学『人文学研究所所報』31、1990.3）を参照されたい。
- (7) （大麥）嶺畔舊有法空寺、資聖院、盧園、淨安院、崇真宮、浮嚴院、隆興庵、水陸庵、妙心寺、並廢。法空寺舊名資慶、資聖院為濮王墳。盧園、宋內侍盧允升小墅、景物奇秀、有池、文石甃砌、水洌而深、異魚種集。「西湖十景」所謂「花港觀魚」即此地也。
- (8) 湖中舊有三塔、湖心寺、並廢。三塔、俱在外湖、三坻鼎立。皇明弘治間、僉事陰子淑者、秉憲甚厲。時湖心寺僧倚恃鎮守中官、不容官長以酒肴入。陰公大怒、廉其姦事、立毀之、併去其塔。相傳湖中有三潭、深不可測、「西湖十景」所謂「三潭印月」者是也、故建三塔以鎮之。
- (9) この図が正しいとすれば、現在湖中にある島の全てが元代以降に築かれたことになるが、それは『西湖遊覽志』の記述と一致しない。仮にこの図で島が省略されているのだとすれば、この図全体のリアリティが疑わしくなる。
- (10) この件については、拙稿「日中文化交流の一側面 『西湖佳話』と津藩の治水事業について」（神奈川大学アジア研究センター刊『アジアの多様な水事情（仮題）』、2018.3刊行予定）を参照されたい。
- (11) 亀井茲矩については以下のような資料と紹介とがある。

その後、九州征討、朝鮮出兵にも従軍、秀吉から琉球征服の朱印を得、琉球守と称した。慶長5（1600）年の関ヶ原の戦では徳川家康方に属し、家康より同国高草郡をあてがわれ、計3万8000石を領した。気多郡日光池や高草郡湖山池の干拓を手掛け、千代川左岸に延長22kmにもおよぶ大井手用水を設ける。南方種の稲を栽培させ、桑・楮の植樹に努めるなど産業の振興を図るとともに、文禄年間（1592～96）から伯耆国日野郡の銀山を経営した。また慶長12（1607）年から3度にわたってサイヨウ（マカオ周辺）、シャム（タイ）に貿易船を派遣。家康とシャム国王の仲介にも努めている。（井上寛司）『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞出版）

『鳥取県史第2巻中世』（昭和48年3月31日鳥取県発行）の因幡国天正10（1582）の項目に「6・8 因幡鹿野の亀井貞（茲）矩、羽柴秀吉に謁す。これより先、貞（茲）矩出雲一国を約諾されていたが、出雲は毛利ときまり、秀吉に琉球を請い許さる。」とある。（寛永諸家系図伝）（なお、引用文は同県によるネット公開の部分によった。下線部は引用者による。）

また、鳥取市西部地域文化活用実行委員会主催の「亀井茲矩公没後400年記念事業」の一環として行われた講演の中で、茲矩についての詳しい紹介が行われ。鳥取市鹿野往来交流館のホームページに掲載されており、参考に挙げる。

1595（文禄4）年卯月（4月）3日付の豊臣秀吉の朱印状があります。これには、西伯耆の日野の山で

銀山を発見したことをはめて、早く掘り出して差し出すよう命じています。〔『亀井文書』国立歴史民俗博物館蔵〕この日野銀山の経営は翌文禄5年には西伯耆3郡の領主吉川広家に移されています。(鉱山開発)

海外貿易で持ち帰らせたシャム(タイ)の稲・生姜や、明(中国)の茶・薬草などの栽培を進めるなど領民の生活を豊かにするための努力を重ねました。(海外貿易)

『道月余影』には、茲矩は琉球を征伐しようとして許されず、考えを変えて海外と通商しようとし1607(慶長12)年8月15日朱印状を受け、庶子鈴木八右衛門を異国回船売買の総奉行として長崎に派遣し、大船を造って家臣の多賀兵衛・塩五郎太夫・梶屋弥右衛門らに気多・高草の漁民を船夫として付け、代わる代わる渡航させた、と記されています。この慶長12年の西洋行に続いて、慶長14・15年の暹羅(タイ)行の2通の朱印状が下付されています。(朱印船貿易)

貿易品として刀剣・金銀の細工物・蒔絵の道具などを買入れて輸出し、絹織物・毛織物・動物の角や毛皮・象牙・珊瑚・香木類・白檀・黒檀・紫檀などを輸入しています。また驢馬・野牛(水牛?)を船に乗せて帰り湖山池の青島に放したところ、寛永のころまで生きていたといわれます。稲・生姜も持ち帰らせて栽培させています。茲矩は朱檀・黒檀・白檀・花欄(しゅろ)など珍しい材で城中に御殿を建てましたが、移封の後1629(寛永5)年に焼失しています。(貿易の成果)

亀井武蔵守茲矩の朱印船貿易はこの3回だけでなく、さらに雄大な計画があったことが伺えます。それは長崎の塩五郎太夫に宛てた慶長13年4月4日付の手紙に、長崎で黒船成(西洋型帆船)の60万斤(約260t)積の船を造り、赤土を塗って赤船に仕上げたいこと、この船の材は薩摩の島津右馬頭殿に約束を取り付けたこと、上手な船大工を調べておくことなどが記されていますが、この黒船成の60万斤積の船が造られたかどうか分かりません。どうも計画だけに終わったように思われます。

それは慶長15年3月3日付の暹羅の握浮純廣(日本人町の頭領)から、亀井武蔵守茲矩に宛てた書簡(『亀井家文書』国立歴史民俗博物館蔵)に、頼まれていた80万斤(約350t)積の船は買えなかったこと、代わりに小型の船を買上げたこと、この小型の船は暹羅で一番良い船であること、来秋はこの船で渡航することを勧めていることから察しられます。ところが慶長14年9月、幕府は西国諸大名所持の500石以上の船の没収・破却を命じ、翌15年淡路島沖で大船を破却させたといわれます。このため諸大名の朱印船貿易は出来なくなりました。(未達成の壮大な計画)

薩摩(鹿児島県)から杉苗を取り寄せて鷲峰山に植えさせるなど、林業の保護育成につとめる一方、海外貿易で持ち帰らせたシャム(タイ)の稲・生姜や、明(中国)の茶・薬草などの栽培を進めるなど領民の生活を豊かにするための努力を重ねました。(産業重視と貿易)

<http://www.shikano-net.com/kamei/index.html>

ここで注目しておきたいのは、亀井氏がもともと鉱山開発と関わっていたことである。移封の結果、息子の政矩が藩主となった津和野に隣接する笹ヶ谷鉱山は、幕府直轄の石見銀山の領地に組み入れられ、重要な鉱山として開発されていた。この笹ヶ谷鉱山の開発や運営に亀井氏が何らかのかたちで関わっており、そこから得られる利益の一部が亀井氏の貿易の資金になっていたのでは、というのが筆者の想像である。

- (12)「心越禅師と徳川光圀の思想変遷試論—朱舜水思想との比較において—」(二松学舎大学『日本漢文学研究』3号, 2008. 3)を参照。

- (13) 前掲拙稿「日中文化交流の一側面 『西湖佳話』と津藩の治水事業について」を指す。

付記:『西湖遊覧志』については、嘉靖刊本に基いた排印本(1958年中華書局出版)を底本とする重印本(1980年上海古籍出版社出版)によった。